

氏名(本籍)	岩 ^{いわ} 田 ^た 彩 ^{せい} 志 ^じ (茨城県)		
学位の種類	博士(言語学)		
学位記番号	博乙第1,205号		
学位授与年月日	平成8年7月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	文芸・言語研究科		
学位論文題目	STUDIES IN LEXICAL NETWORK THEORY (語彙ネットワーク理論の研究)		
主査	筑波大学教授	Ph.D.	中右實
副査	筑波大学教授	Ph.D.	原口庄輔
副査	筑波大学助教授	博士(言語学)	鷺尾龍一
副査	筑波大学助教授	文学博士	廣瀬幸生
副査	筑波大学教授	文学博士	古川直世

論文の内容の要旨

本論文は英語の動詞の多義性 (polysemy) を広範囲にわたって分析し、多義性を記述するための包括的な枠組みを提唱したものである。

本論文は大きく四つの部門に分かれ、全部で10章から成る。第1部はひとつの章から成り、ネットワーク (network) という道具立ての必要不可欠性を論ずる。第2部と第3部は合わせて五つの章から成る。ここでは二つのタイプのネットワークの区別の必要性とその結びつきについて詳論する。第4部では、さらなる事例研究を通して、ここで提唱されたネットワーク理論の有効性が検証される。

第1部は第1章だけから成る。ここでは、まず、Jackendoff (1990) による英語動詞 hit の分析を批判的に検討する。Jackendoff (1990) は先行研究のなかでも生成統語論の語彙分析の流れを代表するものだからである。ここで Jackendoff は hit の代表的な三つの意味を取り上げ、表記法を工夫することによって、それらの意味をひとつの語彙記載項目にまとめる分析法を提唱している。しかし事実関係を突き詰めてみると、hit には三つの意味以外に多様な意味が存在し、表記法を工夫するだけでは、その多義性を適切に関連づけることはできないことが判明する。むしろ、hit の多様な意味はそれぞれが独自の語彙記載項目の資格を有し、そのうえで、相互に関連づけられるようなネットワークができあがっているとする見取り図が描かれる。

この考えを支持する理由は別の考察から得られる。①hit とほぼ同義とされる strike を調べてみると、hit とは違ったネットワークを形づくっているとみる証拠があり、各動詞の意味の全体を予測することがきわめてむずかしいこと、また②英語のひとつの動詞の多義性が日本語では別個の複数の動詞に対応すること、③理論的にみても、投射原理 (Projection Principle) の精神を生かそうとすれば必然的に動詞の意味を区別しなければならないこと、これらはいずれもネットワーク分析の必要性を示唆している。

第2部と第3部はネットワーク理論の内部構成を明確化することを眼目とし、二種類のネットワークを提唱する。第2部ではGネットワーク (Grammatical network) の必要性が、また第3部ではSネットワーク (Semantic network) の必要性が論証される。

第2章では、load hay onto the wagon と load the wagon with hay に代表される所格交替 (locative alternation) の現象が取り上げられる。代表的な分析に Pinker (1989) や Rappaport and Levin (1988) など、語彙規則によ

る派生分析がある。著者によれば、これらの分析では V レベルと VP レベルの意味が混同されているために、さまざまな問題が生ずるとし、本論文では前者を L(exical)-meaning, また後者を P(hrased)-meaning と呼び直したうえで、L-Meaning が意味的に合致する統語的フレームと結びついた結果として P-meaning が得られる、とする意味・形成対応モデルを新たに提案する。このモデルを用いることによって、所格交替動詞のなかでも語彙派生分析で困る例が自然に扱えることを例証している。

第 3 章では、この意味・形式対応モデルに関する議論を深め、さらなる証拠を求める。まず、このモデルが Goldberg (1992 a,b) の提唱する構文文法 (Construction Grammar) 分析と基本的に同じであることを示し、さらにとくに除去動詞の所格交替、名詞由来動詞、使役交替、直接目的語選択について、既存分析の問題点を排除する一方、新知見をも取り込む形で、このモデルの一般的有効性が示される。

第 4 章では、移動動詞についてしばしば観察される移動 (motion) と広がり (extent) の意味の関連性を扱う。Amy went from Denver to Indianapolis. と This road goes from Denver to Indianapolis. における go の二つの用法がそれにあたる。Jackendoff (1983) はこれを GO と GO_{Ext} の二つの意味関数で分析しているが、両者の関連性についてははっきりした結論を出していない。本論では、GO と GO_{Ext} は内部構造をかなりの部分で共有しているとはいえ、別個の関数であることを示し、さらに GO_{Ext} 関数による分析のほうが、Langacker (1986, 1987), Lakoff (1987), Lakoff and Turner (1989) の分析よりも優れていることを示す。

第 3 部は第 5 章と第 6 章から成る。第 5 章では、一見同じと考えられがちなメタファーと主題関係 (thematic relations) の性質を突き詰め、その類似点と相違点を明らかにする。Jackendoff (1992) は異なる意味領域間に見られる平行性は、Lakoff (1992) のいうように、メタファー写像 (metaphorical mapping) により作りだされるものではなく、むしろ各意味領域にもともと存在する固有の特性の一定部分に関して対応しているだけであると主張している。しかし著者は、メタファー写像による分析も、結局は、各意味領域に固有の特性を認めることになるので、これら二つの立場は異なるとはいえ、決して相反するものではないことを論じている。

第 6 章では、第 5 章の結論を基に Jackendoff の提唱する三つの非空間的意味領域 (時間, 所有, 同定 (identification) がどのような構造をしているかを考察する。これらの意味領域はそれぞれ独自の特性をもち、具体的空間領域よりも許容範囲が狭く、平行性が認められる部分と認められない部分があり、後者こそが語彙研究において格段に重要な意味合いをもつことが指摘される。

第 4 部は四つの章から成り、さらなる事例研究にあてられる。第 7 章では動詞 pass のさまざまな意味を、関数構造にメタファーを組み合わせたネットワークとして、適切に分析できることを示す。さらに第 8 章から第 10 章では、認知言語学の分野で開発された新しいメカニズムが導入される。第 8 章では、extend の多義性を記述するために再帰的経路 (reflexive path) とプロフィール転換 (profile shift) が援用される。第 9 章では、cover の分析にイメージ・スキーマ変換 (image-schema transformation), 含意の遠近化 (メトニミーの一種) が、また第 10 章では、活性領域 (active zone) が取り入れられる。

また第 10 章では、上下の概念を含む五つの関連した動詞 rise, raise, lift, drop, fall を分析し、ここにみる含意・反意・同意といった意味関係を適切に捉える方策を考える。これらの意味関係が成り立つのは、動詞相互間においてではなく、各動詞がもつ個別的意味の間においてであることが示される。これにより、ネットワーク理論がひとつの動詞内の意味関係だけでなく、動詞相互間の意味関係をも適切に捉えるのに決定的な役割を果たすことが明らかとなる。

審査の結果の要旨

本論文は、英語の多岐にわたる動詞の意味を緻密に分析することによって、各動詞の多義性を適切に記述するための枠組みを提唱したものである。動詞が相互に関連した複数の意味をもつとき、それらの意味を、個々別々

に記述するのではなく、むしろ、全体でひとつのネットワークを成すような形で関係づけることを可能にする全体理論を構築しようとする試みである。

ここでネットワークという考えかた自体は、決して新しいものではないが、本論文における独自の主張は、このネットワークが二種類の下位ネットワークから成り立っているとする点である。多様な意味関係の性質を突き詰めることによって、G ネットワークとS ネットワークの区別の必要性を論証し、ネットワーク内部の下位構造とその関係づけを解明したことは高く評価される。

さらに、ネットワーク分析にL-meaning と P-meaning の区別に基づく意味・形式対応モデルを導入することによって、従来の語彙派生分析の問題点を克服する方向性を明らかにした点も大きな成果である。

結果的には、G ネットワークは生成文法の語彙意味論で研究されている項構造の交替現象を記述対象とするのに対し、S ネットワークはLakoff に代表されるメタファー現象を記述対象としている。これを現代言語学の視野で見ると、語彙論研究における二つの大きな潮流を、相反するものとしてではなく、むしろ相補的なものとして捉え直し、両陣営で得られた知見を統合する試みとして、既存理論を超えた新しい可能性を開くものである。

まとめていえば、本論文で提唱されたネットワーク理論は、経験的に妥当かつ包括的な記述モデルを提供するもので、語彙意味論研究の最前線をゆく独自の研究成果として学界に寄与するところはきわめて大きい。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。